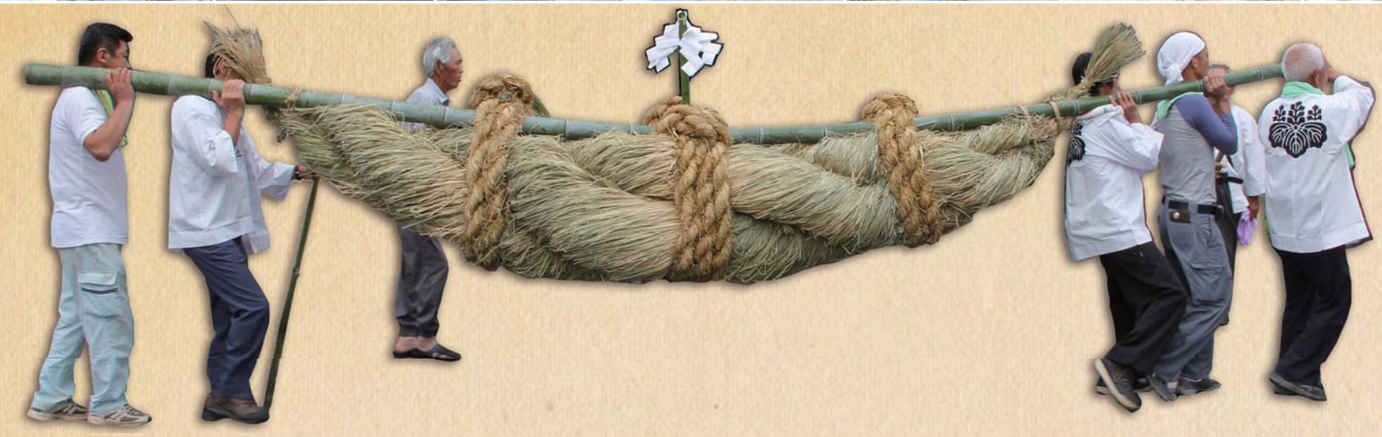
長崎地区の大注連縄作りに密着

900年の時を超え、今なお、受け継がれる伝統行事



①編みやすくするため水に浸す②③太さを均一にするための『すき作業』④竹に縛る紐も手作り⑤金子家の敷地内に集まり作業をする皆さん⑥力いっぱい編みこむ⑦複数の大人の力で縛りあげる⑧３本を一つにねじ込み一つの大注連縄に⑨竹の棒に縛り付けるのが一番の労力⑩完成は引き渡す直前⑪間眠神社の鳥居にいざ取り付け⑫今年も無事、奉納できたことを誇る長崎の役員⑬「歴史の重みに責任を感じる」と語る当主の金子啓一さん

長崎の金子稲荷と三島の間眠神社

時は平安時代。源平の対立に敗れ14歳で蛭ケ島に流された源頼朝は、源家再興の大願を立て、三島大社に百日祈願を行っていました。

大社へ行く途中、頼朝は松の大樹の下にある祠で、休息をとったり、身なりを整えたそうです。この祠の場所が、今の三島市東本町にある間眠神社であり、そしてこの神社に祀られていた祠こそ、長崎地区の『金子稲荷』であったと伝えられています。

現在の金子稲荷

金子稲荷とは、伊豆の国市長崎地区の金子氏宅（現在の当主は金子啓一さん）にある屋敷神として、当時から敷地内に祀られていました。

頼朝が休んだと言われる一枚石

現在は６代目となる松が健在

神社入口の案内看板

狩野川は今の河道とは大きく異なり、土手和田地区の蛭ケ島や、多田地区周辺を流れていたと考えられています。当時から、暴れ川として知られた狩野川は、大雨のたびに氾濫し、周辺住民を脅かしていました。特に長崎地区の水害は頻繁で、大雨のたびに被害にあっていたそうです。（右地図参照）

あるとき、洪水により金子稲荷の御神体が流されてしまいました。その御神体が流れ着いた場所こそが、間眠神社だそうです。それからというもの、長崎の人たちの間眠神社への信仰は厚く、毎年、欠かさず8月1日の間眠神社例大祭に合わせ、大注連縄を奉納しています。

長さ約４ｍ、胴回り約2.5ｍ、重さ約１５０kgの大注連縄を、長崎の人は今も当時と変わらず、区民が一つとなり、ワラと竹のみを使用し作ります。７月31日から作り始める大注連縄は、間眠神社からの『お迎え』が来る、8月1日の午前中までかかって完成にこぎつけます。今でこそトラックで運んでいますが、昔は間眠神社までの約６㎞の道のりを、担いで運んでいたそうです。

かつて（大正時代）、注連縄を作るのが面倒だということで、木製のものを作成したことがありました。しかし、たちまち、間眠神社周辺住民に疫病が流行るなど、不幸が発生。急きょ、これを止め、木製のしめ縄を二つに割って両側の柱にしばらく貼り付けたそうです。

長さ 222㎝の木製の注連縄
（三島市郷土史料館所蔵）

９００年の時を超えて、今なお、受け継がれる伝統行事。“歴史のまち伊豆の国”を象徴するようなこの行事を、私たちは残していかなくてはなりません。

参考：韮山町史・伊豆大辞典・間眠神社内設置看板・間眠神社氏子総代会

問 秘書広報課 ☎055（948）1431